Doshisha Clinical Psychology: Therapy and Research
2017, Vol. 7, No. 1, Pp. 35-48

研究動向

複数の人種的背景を持つ人々を対象とした臨床的事例研究の展望

Review of clinical case studies of multiracial people

藤岡　勲[1]

Isao FUJIOKA

要　約

日本において「混血児」「国際児」「ハーフ」「ダブル」等と呼ばれるような複数の民族的背景を持つ人々は増加しているが，かれらを対象とした研究は限られている。民族と人種の違いはあるものの，欧米では複数の人種的背景を持つ人々の研究が蓄積されているが，かれらを対象とした臨床的事例研究の傾向までは把握できていない。さらに，欧米では臨床的事例研究法の重要性が再認識されているが，その実際は日本では充分に知られていない。そのような状況において本稿は，複数の人種的背景を持つ人々を対象とした，査読付き雑誌に掲載された臨床的事例研究論文のレビューを行った。その過程を通して，複数の人種的背景を持つ人々を対象とした研究および支援にはどのような傾向があるのかを検討した。そして，複数の人種的／民族的背景を持つ人々に対して心理援助活動を行ううえで，また，かれら以外の人々も含む対象に対して研究活動を行ううえで求められる点を示した。

キーワード：民族，人種，マイノリティ，方法論，多文化間カウンセリング

問題と目的

日本において，「混血児」「国際児」「ハーフ」「ダブル」等と呼ばれるような複数の民族的背景を持つ人々が増えている[2]。人口動態統計（総務省統計局，n.d.）をみると，2000年から2015年の父母の国籍別にみた年次別百分率は1.9%－2.1%と継続して一定の値を示している。さらに，たとえば，2015年の東京区部の同値は3.7%，そして，大阪市の同値は4.2%となっていることからも，地域によってはもはや珍しい存在ではなくなりつつあるとも言える。

このような状況にありながらも，日本でかれらを対象とした研究は依然として限られている。たとえば，日本においても，探索的な質的研究を通して，かれらの複雑な民族的アイデンティティを体系的に理解する試みはある（藤岡，2014a）。しかし，日本の心理学関連の学会でもっとも会員数が多く，大半の心理臨床家が在籍する日本心理臨床学会の機関誌である『心理臨床学研究』において，かれらを対象とした研究はない（藤岡，2014b）。

民族と人種の違いはあるものの[3]，欧米には，異なる背景を持つ両親のもとで生まれた人々という点で共通している，複数の人種的背景を持つ人々（multiracial people）がいる。そして，

1　同志社大学心理学部（Faculty of Psychology, Doshisha University）

2　複数の民族的背景を持つ人々の呼び方については，岡村（2016）が詳しい。

Table 1　複数の人種的背景を持つ人々の固有な困難

1	個人が持っている自己認識と社会がかれらに押し付ける認識の食い違い
2	自身のアイデンティティの選択を自分に対してだけでなく，社会に対しても正当化しなければならない
3	自身を構成する複数の背景をあらわすカテゴリーに同時に自己を結びつけるよりも，そのいずれかを強制的に選ばなければならないように感じることがある
4	手本となるような人物（role model）を見つけることが難しい
5	家族内においてもアイデンティティに関して矛盾したメッセージが送られる
6	マジョリティ集団だけでなく，マイノリティ集団からも拒絶されやすい

注）Shih & Sanchez（2005）をもとに作成した。

かれらについての研究は，欧米では一定の蓄積があり，それらの研究をまとめる作業が展開している。その一つとして，1990年から2009年の20年間に米国を中心とした査読付き雑誌に掲載された125本の複数の人種的背景を持つ人々を対象とした論文（133の個別の研究が含まれる）の内容分析（content analysis；Charmaraman, Woo, Quach, & Erkut, 2014）がある。Charmaraman et al.（2014）では，たとえば，複数の人種的背景を持つ人々を対象とした133の研究の55%が，かれらのアイデンティティについて扱ってきたことを示していた。このことからも，かれらの他集団との違いが着目されてきたと言えよう。

このような欧米の知見から，複数の人種的背景を持つ人々は，必ずしもそうでない人々に比べ病理的ではないが，その一方で，Table 1にあるような固有な困難が研究のレビューから示されている（Shih & Sanchez, 2005）。

以上から，複数の人種的背景を持つ人々は，必ずしも「弱者」というわけではないが，心理援助場面においても，かれらならではの固有の問題が展開している可能性がある。これまでにも複数の人種的背景を持つ人々を対象にした臨床的事例研究（clinical case study）[4]は存在する。しかし，それらの研究は個別に展開されており，それらの知見を比較し，傾向を見る作業は行われていない。有益な心理援助を複数の人種的／民族的背景を持つ人々に提供するためには，そのような作業を通して支援の参照枠となるような知見を導き出すことが求められると言えるだろう。

複数の人種的／民族的背景を持つ人々を対象とした研究領域においてこのような状況がある一方で，臨床心理学の方法論に関しては，臨床的事例研究の意義を再評価し，発展させる動きが展開している（Dattilio, Edwards, & Fishman, 2010；Edwards, Dattilio, & Bromley, 2004；Fishman, 2005, 2013；Iwakabe & Gazzola, 2009；McLeod, 2010）。たとえば，McLeod（2010）は，臨床的事例研究の意義を，Table 2のように整理している。また，臨床的事例研究論文において記載する情報を構造化させることにより，多様な事例でも比較可能とするデータベース化の試みも展開し

[3] 本稿では，民族を「社会的，文化的，言語的，宗教的，人種的なバックグラウンドを共有する人々の集団」（VandenBos, 2007 繁桝・四本監訳 2013，p.857）として，そして，人種を「身体的特徴，祖先や言語といった共通性によって，人口を部分化したり，“区分”するためによく用いられる社会的概念」（VandenBos, 2007 繁桝・四本監訳 2013，p.449）として用いている。なお，両定義にもあらわれているように，民族と人種という概念は，一部共通するところがある一方で，民族は文化を，そして，人種は身体的特徴に重点が置かれているという違いもある。

[4] 臨床心理学の分野では，「臨床的事例研究」という表記よりも，「事例研究」と表記されることの方が多いであろう。しかし，他の学問分野における事例研究と臨床心理学分野の事例研究は異なる特性があるとも考えられる。そこで，本稿では，両者を区別するため，本稿が対象とする臨床心理学分野の事例研究を「臨床的事例研究」と表記した。

ている（Fishman, 2005）。さらに，臨床的事例研究を質的研究法と量的研究法を組み合わせた混合法（mixed method）とからめて発展させる動きもある（Dattilio et al., 2010）。そのなかには，無作為化比較試験（randomized controlled trial；以下，RCT）のなかでも成功および失敗事例について詳細に検討する形で，効果研究と臨床的事例研究の有機的な結びつきを検討しているものもある（Fishman, Messer, Edwards, & Dattilio, 2017）。

Table 2　臨床的事例研究の意義

●心理援助の土台となる知見の発展に対する意義
・新たな心理療法アプローチの記述・評価・伝播
・心理援助に対する市民の理解への貢献
・理論の発展
・実践における重要な事柄への注意喚起
・大規模な効果研究についての理解の拡充
・訓練における臨床的事例研究の活用
●事例にもとづく知見が持つ特有の貢献
・ナラティブとしての理解
・複雑性をあらわす手段
・文脈の不可欠性
・専門性の実践についての記述および分析

注）McLeod（2010）をもとに作成した。

このような方法論に関する動向が欧米にあるにも関わらず，日本では充分にはその実情が知られていない。例外的に岩壁（2013）や野田（2014）が欧米の動向を紹介している。しかし，依然として，日本の臨床的事例研究といえば，セラピストの視点にたった質的記述を中心にしたもの，あるいは，量的データを収集し分析する一事例実験デザインにもとづくもののどちらかという印象が強いのではないだろうか。

以上をふまえ，本稿は，複数の人種的背景を持つ人々を対象とした，査読付き雑誌（peer reviewed journals）に掲載された臨床的事例研究論文のレビューを行う。その過程を通して，複数の人種的背景を持つ人々を対象とした研究および支援にはどのような傾向があるのかを検討する。また，その検討をふまえて，今後，複数の人種的／民族的背景を持つ人々を支援する際，また，臨床的事例研究を行う際には，どのようなことが重要となりえるかについても示す。なお，本稿が査読付き雑誌に掲載された論文のみを対象とするのは，それらが一定の質を保ちやすいと考えたからである。

対象論文の選択法

本稿のレビュー対象論文は，次の手順で選択した。まず，本稿ではアメリカ心理学会（American Psychological Association）が運営しているデータベースである PsycINFO を利用した。そして，複数の人種的背景を持つ人々を対象とした査読付き雑誌に掲載された臨床的事例研究論文を選択するため，2017年8月3日に次のような検索を行った。検索時には，第1の設定として，検索項目の全てのフィールド（fields）を対象に，Shih & Sanchez（2005）にならい“biracial”，“multiracial”，あるいは，“interracial offspring”という単語やフレーズが入っているものを選択するよう設定した。そして，第2の設定として，第1の設定との“and”条件の形で，方法論（methodology）の項目に対しては，選択肢の一つとなっている“Clinical Case Study”に該当するものを選択した。ただし，これでは，実際は複数の人種的背景を持つ人々を対象とはしていないが，引用文献のタイトル等に“biracial”，“multiracial”，あるいは，“interracial offspring”という単語やフレーズが入っているものが抽出されてしまう。そのため，第3の設定として，引用文献（references）のフィールドには，“biracial”，“multiracial”，あるいは，“interracial offspring”という単語やフレーズは含まないよう“not”条件で設定した。さらに，本稿は査読付き雑誌に掲載された論文のみを対象としたことから，第4の設定として，出版物の分類（publication type）のフィールドにおいて“Peer Reviewed Journal”，そして，記録物の分類（document

Table 3　対象論文の出版年と誌名

著者	出版年	誌名
Lyles, Yancey, Grace, & Carter	1985	*Journal of the American Academy of Child Psychiatry*
Ratigan	1995	*Psychodynamic Counselling*
Caldwell	1995	*Journal of Family Psychotherapy*
Takeuchi	2000	*Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*
Walker, Burman, & Gowrisunkur	2002	*Psychodynamic Practice*
Freeman	2004	*Clinical Case Studies*
Tummala-Narra	2007	*Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*
Bonovitz	2009	*Psychoanalytic Dialogues*
Staley & Lawyer	2010	*Clinical Case Studies*
Puff & Renk	2015	*Clinical Case Studies*
Loveless, Whited, Rhodes, & Cellucci	2016	*Clinical Case Studies*

type）のフィールドにおいて“Journal Article”に該当するものを選択した。

これらの選択条件の結果から，18本の論文が抽出されたが，次の理由に該当するものは，本稿の対象外とした。それらは，(a）心理援助が提供されていないもの，(b）“biracial”，“multiracial”，あるいは，“interracial offspring”であるのが施設やカップルであり，複数の人種的背景を持つ人々を指していないもの，(c）異人種間の養子関係にあり，生物学的な親子関係にないもの，(d）複数事例の短い紹介を通して理論的／実践的に重要となる点を示したもので，支援の記述を中心とした，いわゆる臨床的事例研究とは異なるもの，(e）研究者／臨床家が仮に対応するとしたらどのように支援をするかという内容のものであり，実際の支援にもとづかないものであった。

以上の手順を踏んだ結果，残った11本の論文が本稿のレビュー対象となった。

対象論文の傾向

上記の過程で本稿の対象となった11本の論文の傾向について，(a）出版年と誌名，(b）クライエント，(c）心理援助，(d）人種，(e）方法論という5つの側面のレビューを行う。

出版年と誌名に関する傾向

Table 3は，上述の11本の論文の出版年と誌名についてまとめたものである。

まず，出版年についてみると，2000年辺りを境に，複数の人種的背景を持つ人々を対象とした研究が増えていた。具体的には，1980年代は1本，1990年代は2本と少なかった一方で，2000年代は5本，そして，2017年8月3日時点で2010年代は3本の論文があった。この2000年辺りが境となる傾向は，先述の内容分析（Charmaraman et al., 2014）でも見られた傾向であった。このことから，研究法に限らず，2000年辺り以降から複数の人種的背景を持つ人々を対象とした研究が増加傾向にあることが示唆された。今回の対象論文は必ずしも米国のものだけではないが[5]，この傾向は，米国において複数の人種的背景を持つ人々が増えていることに加え（Jones & Bullock, 2012），2000年の国勢調査から複数の人種的背景が回答可能となったことにもあらわれている社会的な動き（Omi & Winant, 2015）が，背景にあるとも考えられる。

[5] 本稿のレビュー対象となっている11本の論文のうち，Ratigan（1995）と Walker et al.（2002）は英国での心理援助をもとにしたものであった。その他の論文に関しては，明記されていないものも著者の所属等から，米国での心理援助をもとにしたものであったと考えられた。

次に，誌名からもいくつかの傾向がみられた。まず，*Clinical Case Studies* には4本が掲載されていた。*Clinical Case Studies* は臨床的事例研究に特化した雑誌であり，論文の構成要素を指定することで，成功事例の再現性を高めようとする目的を持つ (SAGE Publishing, n.d.)。このことから，*Clinical Case Studies* 自体の特性が複数の人種的背景を持つ人々を対象とした研究を掲載させやすいとは考えにくい。しかし，先述のように2000年辺りを境に複数の人種的背景を持つ人々の研究自体が多くなっていることから，その動向の影響を受けているとも考えられる。

次に，雑誌は異なるものの，Ratigan（1995），Walker et al.（2002），Bonovitz（2009）の3本が精神力動系アプローチの雑誌に掲載されていた。これは，精神力動系アプローチにとって，複数の人種的背景を持つ人々が「魅力的」な研究対象に映っている可能性が示唆される。精神力動系の枠組みは，イド・自我・超自我という概念にもあらわれているように，(a) 個人の内面，そして，(b) そのような内面と社会との関係性を重視している。他方，複数の人種的背景を持つ人々は，両側面において複雑性が高いと考えられやすい。このような両者の傾向が合致する面があることから，「魅力的」に映っているとも考えられる。

なお，Takeuchi（2000）が掲載されている *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology* は，アメリカ心理学会の Division 45（Society for the Psychological Study of Culture, Ethnicity and Race）が発行している雑誌である。この雑誌は，実証性に重点を置きながら，文化・民族・人種による影響に着目しつつ，これまで充分に研究されてこなかった対象を扱うことを目的としている（American Psychological Association, 2017）。このような目的を持つことから，この雑誌に複数の人種的背景を持つ人々を対象とした研究が掲載されることも少なくない。したがって，本稿で対象としている臨床的事例研究論文がより多く掲載されていても不自然ではないだろう。にも関わらず，Takeuchi（2000）の1本しかなかった。このことは，この雑誌が必ずしも臨床分野に限定された雑誌ではないことだけに限らず，臨床的事例研究法の実証性が依然として不十分だと研究者間で考えられている可能性を示唆している。

クライエントに関する傾向

Table 4は，上述の11本の論文におけるクライエントに関する情報をまとめたものである。

まず，年齢に関しては，大きな偏りはなかった。具体的には，年齢は，10歳未満が1本，10

Table 4　対象論文のクライエントに関する情報

論文	年齢	性別	主な症状／問題
Lyles et al.（1985）	11	女性	規律上の問題，および，低い学業成績
Ratigan（1995）	20代	男性	うつ，急な気分の変化，睡眠困難，孤独感
Caldwell（1995）	14	女性	他殺および家出願望
Takeuchi（2000）	13	女性	統合失調症様障害（文化症候群の fakamahaki）
Walker et al.（2002）	38	女性	虐待関係にともなう恐怖，罪悪感，恥，うつ状態
Freeman（2004）	13	男性	夜尿症（一次性）
Tummala-Narra（2007）	30	女性	トラウマに付随する頭痛／不安／過敏／睡眠困難
Bonovitz（2009）	40代	女性	明記なし
Staley & Lawyer（2010）	46	男性	大うつ病性障害と社交不安障害
Puff & Renk（2015）	5	男性	心的外傷後ストレス障害，分離不安，抵抗性
Loveless et al.（2016）	34	女性	境界性パーソナリティ障害

代が4本，20代が1本，30代が3本，40代が2本であった。複数の人種的背景を持つ人々が増加したり着目されるようになったのが近年であることから，高齢者のクライエントを対象としたものがないことは自然だとも考えられる。しかし，将来的には高齢者のクライエントを対象とした論文が発表されることも望まれる。

次に，性別に関しては，女性を対象とした論文の方が多かった。具体的には，女性が7本，男性が4本であった。男性の方が女性よりも専門的支援を受けない傾向があることが，多数の研究をふまえて指摘されている（Addis & Mahalik, 2003）。したがって，本稿の対象論文からも，複数の人種的背景を持つ人々も，同様の傾向がある可能性が示唆された。

次に，主な症状／問題に関しても，多様性があり，必ずしも複数の人種的背景を持つ人々に特有なものはみられなかった。具体的には，うつに関するものとトラウマに関するものが2本ずつあったが，それ以外は様々であった。さらに，Table 1で示したような，複数の人種的背景を持つ人々の固有な困難そのものが主な症状／問題としてはあがっていなかった。このことから，複数の人種的背景を持つ人々が支援を求める場合においては，かれらの固有な困難が主訴としてあげられるよりも，その他の人々と同様な主訴が告げられる可能性が示唆された。

提供された支援に関する傾向

Table 5は，上述の11本の論文において提供された支援に関する情報をまとめたものである。

まず，提供された支援がより大きな研究プロジェクトの一貫であったか否かについては，Walker et al.（2002）のみが，心理援助活動における人種とジェンダーに着目したプロジェクトの一貫であった。臨床的事例研究は，様々な現場において多様なクライエントに対して個別の支援を提供するという自然な状況（natural setting）をもとにしていることが多いであろう。そしてそれが，複数の人種的背景を持つ人々にも該当することが，本稿の対象論文から示唆された。ただし，このような臨床的事例研究一般に該当するであろう点以外のことにも留意が必要だろう。つまり，複数の人種的背景を持つ人々

Table 5　対象論文の提供された支援に関する情報

論文	状況[a]	心理療法アプローチ	プログラム／プロトコルの適用
Lyles et al.（1985）	自然	精神力動系	明記なし
Ratigan（1995）	自然	精神力動系	明記なし
Caldwell（1995）	自然	家族療法	明記なし
Takeuchi（2000）	自然	薬物療法（一部，遊戯療法）	明記なし
Walker et al.（2002）	研究	精神力動系	明記なし
Freeman（2004）	自然	認知行動療法系	明記なし
Tummala-Narra（2007）	自然	明記なし	明記なし
Bonovitz（2009）	自然	精神力動系	明記なし
Staley & Lawyer（2010）	自然	認知行動療法系	Lejuez, Hopko, & Hopko（2002）[b] および Antony & Rowa（2008）[c]
Puff & Renk（2015）	自然	認知行動療法系	Scheeringa, Amaya-Jackson, & Cohen（2010）[d]
Loveless et al.（2016）	自然	認知行動療法系	明記なし

[a] 状況における「自然」は自然な状況（natural setting）を指し，「研究」は研究プロジェクトの一貫を指す。
[b] プログラム／プロトコル名はBehavioral activation treatment for depression。
[c] プログラム／プロトコル名はCognitive-behavioral therapy for SAD。
[d] プログラム／プロトコル名はPreschool PTSD Treatment。

は，社会的少数派であることに加え，人種の組み合わせ等の面だけでも多様性が多い。さらには，先述のように，多様な主訴を訴えている可能性がある。これらのことから，様々な条件を統制しながら一定のサンプル数を求める研究プロジェクトでは，複数の人種的背景を持つクライエントは対象外となりやすいと考えられる。

次に，セラピストの心理療法アプローチに関しては，精神力動系が4本，認知行動療法系が4本，そして，それ以外のものは1本ずつとなっていた。精神力動系アプローチが多くなっているのは，精神力動系の雑誌が多かった際に書いたことが，その理由として考えられる。他方，認知行動療法系が多くなっているが，これは，複数の人種的背景を持つ人々に対しても，症状／問題が具体的な場合には，個別の症状／問題に対して構造度の高い支援を提供する傾向がある認知行動療法系アプローチが有益であろうことを示唆する。ただ，これら4本はいずれも先にみたように，*Clinical Case Studies* に掲載されていたものであった。したがってこの結果は，構造度の高い支援を提供する認知行動療法系アプローチと，記載内容の構造度が高い *Clinical Case Studies* の特性が，構造度の高さという面で合致していたからだとも考えられる。

最後に，支援が提供される際に，プログラムやプロトコルにもとづいていたか否かであるが，9本は記載がなかった。記載がないことがそれらを参考にしなかったことには直結しない。しかし，論文における事例の記述にあたると，クライエントに合わせた柔軟な支援が描かれていた。他方，プログラムやプロトコルにもとづいたと明記されていたのは Staley & Lawyer（2010）と Puff & Renk（2015）の2本のみであった。プログラムやプロトコルを設ける心理療法アプローチは認知行動療法系のものに限定されないが，他の心理療法アプローチに比べ多いだろう。そして，そのような傾向が，複数の人種的背景を持つ人々に対する支援においてもあらわれていたとも言える。以上から，複数の人種的背景を持つ人々に対しては，プログラムやプロトコルにもとづく支援は少ないようであるが，適用可能な面もあることが示唆された。

人種に関する傾向

Table 6は，上述の11本の論文における人種に関する情報をまとめたものである。

クライエントの人種的背景をみると，両親の背景の組み合わせに偏りがあった。具体的には，黒人と白人の組み合わせが7本と多かった。今回の対象論文は必ずしも米国のものだけではないが，2010年の米国国勢調査では白人と黒人の背景を持つと答えた人々は，複数の人種的背景を持つと答えた人々の20.4%であった（Jones & Bullock, 2012）。本稿の対象論文における割合と，米国国勢調査の割合の違いの背景には，研究者の事例選択のバイアス，背景の違いによる援助要請のあり方の違いなど，様々な可能性が考えられる。しかし，いずれにせよ，社会状況とは異なる形で，支援活動および研究活動が展開されていることが示唆された。

セラピストの人種に関してもいくつかの傾向が見られた。まず，セラピストの人種的背景が論文に記載されていないものが3本あった。これは，(a) 論文においてセラピストを当事者よりも観察者寄りの立場に位置づけていた，(b) セラピストの人種を重視していなかったなど，いくつかの可能性が考えられる。しかし，いずれにせよ，一部の論文において，人種は重視されなかったことが示唆された。

次に，人種面において，マイノリティあるいはマジョリティの立場にあるセラピストは同程度であった。具体的には，人種的マイノリティとしての背景を持つセラピストが4本，人種的マジョリティとしての背景を持つセラピストは4本であった[6]。2013年の American Community Survey をもとにした集計によると，現役の労働力となる心理学者（active psychology workforce）の83.6%が白人であった（American Psychological Association, 2015）。この結果をふまえると，人種的マイノリティの立場にあるセラピストの方が，マジョリティの立場にあ

Table 6　対象論文の人種に関する情報

論文	クライエントの人種	セラピストの人種	複数の人種的背景が与えた影響[e]
Lyles et al.（1985）	白人と黒人	黒人	・自己のあり方 ・重要な他者との関係
Ratigan（1995）	白人と黒人	白人	・自己のあり方 ・社会との関係 ・治療関係
Caldwell（1995）	白人と黒人[a]	明記なし	・明記なし
Takeuchi（2000）	白人とポリネシア系[b]	アジア系	・複数の文化的能力 ・治療関係
Walker et al.（2002）	白人と黒人[c]	黒人[d]	・自己のあり方 ・社会との関係 ・治療関係
Freeman（2004）	白人と黒人	明記なし	・明記なし
Tummala-Narra（2007）	白人と黒人	アジア系	・自己のあり方 ・重要な他者との関係 ・社会との関係 ・治療関係
Bonovitz（2009）	白人と黒人	白人	・自己のあり方 ・社会との関係 ・治療関係
Staley & Lawyer（2010）	アメリカ（詳細は明記なし）とアジア系	白人	・自己のあり方 ・治療関係
Puff & Renk（2015）	白人とアラブ系	明記なし	・明記なし
Loveless et al.（2016）	白人とヒスパニック	白人	・治療関係

[a] 論文においては，イタリア系アメリカ人とカリブ系と記載されていたが，イタリアは白人が多く，カリブ系は黒人が多いことから，白人と黒人と記載した。
[b] 論文ではトンガ人と記載されていた。
[c] 論文ではパキスタン系とも記載されていたが，英国の事例で人種としては黒人（black）と記載されていたため，黒人とした。
[d] 論文では南アジアの背景とも記載されていたが，英国の事例で人種としては黒人（black）と記載されていたため，黒人とした。
[e] 複数の人種的背景が与える影響については，(a) アイデンティティを含む「自己のあり方」，(b) 複数の文化的実践を行う能力である「複数の文化的能力」，(c) 家族や友人等の「重要な他者との関係」，(d) 人種主義による影響なども含む「社会との関係」，(e) セラピストとの「治療関係」に整理し記載した。

るセラピストよりも複数の人種的背景を持つ人々に関心があることが示唆された。

複数の人種的背景を持つことが心理援助に与える影響についてみると，そこでもいくつかの傾向があらわれていた。まず，程度の差はあるものの，治療関係に与える影響について書かれていたものが7本と多くなっていた。このことから，複数の人種的背景を持つ人々に対する支援においては，治療関係がテーマとなりやすいことが示唆された。

Table 7　対象論文の方法論に関する情報

論文	ケースの選択理由	データの種類	分析法
Lyles et al.（1985）	明記なし	質的	明記なし
Ratigan（1995）	明記なし	質的	明記なし
Caldwell（1995）	明記なし	質的	明記なし
Takeuchi（2000）	明記なし	質的	明記なし
Walker et al.（2002）	明記なし	質的	明記なし
Freeman（2004）	明記なし	混合	明記なし
Tummala-Narra（2007）	明記なし	質的	明記なし
Bonovitz（2009）	明記なし	質的	明記なし
Staley & Lawyer（2010）	明記なし	混合	明記なし
Puff & Renk（2015）	明記なし	混合	明記なし
Loveless et al.（2016）	明記なし	混合	明記なし

次に，複数の人種的背景を持つ人々がその背景ゆえに，自己のあり方，重要な他者や社会との関係，そして，複数の文化的能力という面において固有性を持っており，それらが心理援助でもあらわれていた。先述のように，主な症状／問題は，多様であり，必ずしも複数の人種的背景を持つ人々だからというものではなかった。しかし，このように多くの事例において，複数の人種的背景がもたらす固有な側面があらわれていたことは，このような側面が直接あるいは間接的に症状／問題および支援に影響を与えていることを示唆している。

なお，3本の論文においては，複数の人種的背景を持つことが与える影響について記載がなかった。これら3本の論文の症状／問題をみると，必ずしも複数の人種的背景を持つことが直接的に症状／問題に与える影響はないかもしれない。そして，そのために，論文においても記載がなかった可能性がある。その一方で，全ての人間が社会・文化的存在であるにも関わらず，従来の心理援助においては，それらの要因が充分に扱われていなかったという指摘もある（Sue & Sue, 2016）。これら3本の論文は，セラピストの人種的背景についても記載がなかったものであることから，これらの論文においても，そもそも人種をはじめとする社会・文化的影響について充分には目が向けられていなかった可能性も否定できない。

方法論に関する傾向

Table 7は，上述の11本の論文における方法論に関する情報をまとめたものである。

まず，ケースの選択理由については，いずれの論文も明確な基準等は示されていなかった。臨床的事例研究の土台となる実践活動は，RCT などのより大きな研究プロジェクトの一部として展開する場合もあるだろう。そのような場合は，研究対象者全体における対象事例の選択基準は，利用した尺度の点数等をもとに，選択理由を明確に示すことは可能であろう。しかし，先述のように臨床的事例研究の土台となる実践活動は，多くの場合，自然な状況で提供されたものである。そのため，明確な選択基準を示すことは難しい面もあると考えられ，本稿の対象論文も同様の状況にあったと考えられる。しかし，Yin (2018) は，単一事例の選択理由を，（a）特定の枠組みを検証するための「批判的な事例」（critical case），（b）理論的あるいは

[6] 本稿の対象論文は「人種」をもとにした集団の区分けを行っている。その区分に従うと，Bonovitz（2009）のセラピストの属性は，「民族」としてはユダヤ人というマイノリティでも，「人種」としては白人というマジョリティであった。したがって，本稿においてBonovitz（2009）は，マイノリティではなく，マジョリティとして加算した。

実生活的に稀な現象をとらえるための「極端な事例」(extreme case) あるいは「珍しい事例」(unusual case)，(c) 日常的な現象をとらえるための「一般的な事例」(common case)，(d) 接近することが容易ではなかった現象をとらえるための「発見的な事例」(revelatory case)，(e) 現象の時系列的な変容をとらえるための「縦断的な事例」(longitudinal case) という，5つに整理している。したがって，そのような理由を示すことで，方法面における改善も可能であっただろう。

次に，扱われたデータであるが，7本は質的データのみであったが，質と量を合わせた混合データが用いられたものも4本と少なくなかった。先述のように，臨床的事例研究を混合法とからめて発展させる動きがある (Dattilio et al., 2010) が，複数の人種的背景を持つ人々を対象とした臨床的事例研究においてもその動きが見られることが確認できた。なお，質的データのなかには，映像や音声等も含まれるが，いずれの論文も映像や音声の利用に関する記述は見られなかった。そして，そもそも質的データの記録法に関する記述もいずれの論文にもなかった。このことから，利用された質的データは面接の記録（記憶）であることが推測された。

そして，データの分析法については，いずれの論文も明確な記述はなかった。量的データを分析時に利用した4本は，いずれも尺度の得点あるいは行動指標の値をグラフで示す形で，統計的に処理がなされていた[7]。しかし，それら4本を含む11本全てにおいて，特に質的データの分析法に関する記述がなかった。質的研究の質を問ううえでは，誠実さ (sincerity) も求められ，そのためには透明性のある方法の記述が重要となる (Tracy, 2010)。したがって，対象となった論文のどれもが，質的研究法の観点からは限界があったと言える。

[7] 分析時に量的データを用いた4本は，どれも効果指標（効果に関するモニタリング指標を含む）として，尺度および行動指標を用いていた。しかし，心理援助の変容過程に関する情報を集めるプロセス尺度 (process measures；McLeod, 2010) は，データ収集の時点でも用いられていなかった。変容過程の鍵を握る媒介要因をとらえることが重要だと考えられている (Kazdin, 2007) ことからも，今後，プロセス尺度を活用した研究も求められるであろう。

考　察

本稿では，PsycINFO において査読付き雑誌に掲載された11本の複数の人種的背景を持つ人々を対象とした臨床的事例研究論文に対して，(a) 出版年と誌名，(b) クライエント，(c) 心理援助，(d) 人種，(e) 方法論という5つの側面についてレビューを行った。Table 8は，レビューのまとめと，それらをふまえて，今後，実践活動および研究活動において求められる点を整理したものである。

まず，Table 8に示した点は，複数の人種的／民族的背景を持つ人々を支援する際の参照枠として活用できるだろう。たとえば，クライエントの傾向においては，複数の人種的背景を持つ人々は，年齢や性別や症状／問題に関しては，必ずしも特有な面は顕在化されていなかった。この点をふまえることで，複数の人種的／民族的背景を持つ人々に対する支援を提供する際，かれらの固有性だけでなく，他の人々との共通性にも目を向けやすくなるであろう。また，人種に関する傾向においては，治療関係がテーマとなりやすく，複数の背景を持つことによる固有な体験が，直接あるいは間接的に症状／問題および支援に影響を与えていた。これらの点をふまえることで，支援において起こり得ることが予測しやすくなるであろう。

また，Table 8の特に方法論に関する部分は，複数の人種的／民族的背景を持つ人々以外を対象とする場合にも当てはまると考えられることから，これらの点をふまえて研究活動を展開することも有益となるであろう。先述のように，日本で臨床的事例研究といえば，セラピストの視点にたった質的記述を中心としたもの，あるいは，一事例実験デザインにもとづくものがイメージされやすいだろう。そのような状況のな

Table 8　対象論文をもとにした傾向のまとめ，および，それらをもとにした今後の課題

出版年と誌名	(1) 2000年を境に研究が増えた
	(1)' 日本でも社会・時代的変化に呼応して研究を増やすことが求められる
	(2) 雑誌の特性により対象となる程度は異なる
	(2)' 雑誌の傾向をふまえながら理論面・方法面での洗練を行うことが求められる
クライエント	(1) 年齢や性別や症状／問題に必ずしも特有な面は顕在化されていなかった
	(1)' かれらの固有性だけでなく，他の人々との共通性も考慮することが求められる
支援	(1) 研究プロジェクトの一貫としての支援は少なく，多くが自然な状況での支援をもとにしていた
	(1)' 自然な状況での支援も引き続き大切にしながら，研究プロジェクトにおける支援の展開も求められる
	(2) 精神力動系および認知行動療法系のアプローチが多かった
	(2)' 各アプローチの特性をふまえつつ，支援を展開し，情報発信をすることが求められる
	(3) プログラムやプロトコルにもとづく支援も一部展開していた
	(3)' 適宜プログラムやプロトコルの適用可能性を検討しながら，実践および研究活動を行うことが求められる
人種	(1) クライエントの背景として黒人と白人の組み合わせが多くなっていた
	(1)' 背景の組み合わせが支援および研究に与える影響について検討することが求められる
	(2) セラピストの人種的背景は，マイノリティのものが多くなっており，記載がないものも少なくなかった
	(2)' マジョリティ／マイノリティの立場に関わらず，セラピストの背景が支援および研究に与える影響について考慮することが求められる
	(3) 複数の人種的背景を持つことが，治療関係に影響を与えることが多かった
	(3)' 治療関係が重要となる前提で，支援に臨むことが求められる
	(4) 複数の人種的背景を持つことによる固有な体験が，直接あるいは間接的に症状／問題および支援と関係していた
	(4)' 固有性をふまえたケース・フォーミュレーションと介入が求められる
	(5) 複数の人種的背景が持つ影響について記載がないものも一定数あった
	(5)' ステレオタイプ的な見方には注意しつつも，社会・文化的要因が持ちうる影響についての感受性を向上させることが求められる
方法論	(1) 事例の選択理由について，明確な基準等が示されていなかった
	(1)' 事例選択の理由を考慮し記述することを通して，方法面での洗練が求められる
	(2) 質的・量的両データが使われていたものが限定的であったうえに，質的データの記録法については記載がなかった
	(2)' 状況や目的等に合わせて，多様なデータの利用を検討し，可能な範囲で録音／録画等を通して正確な記録をとることが求められる
	(3) データの分析法（特に質的データに対して）について記載がなかった
	(3)' 研究の評価，および，実践／理論／方法論の発展のためにも分析に関する記述を示すことが求められる

注）数字のみで示したものが本稿のレビューから見られた傾向を指す。そして，数字とアポストロフィで示したものが，その傾向をふまえた今後の課題を指す。

か，今後，日本においても臨床的事例研究を行う際には，(a) 事例選択の理由を考慮し記述したり，(b) 状況や目的等に合わせて，多様なデータの利用を検討し，可能な範囲で録音／録画等を通して正確な記録を取ったり，(c) 分析法に関する記述を加えることを通して，方法論の面でより洗練された研究を行うことが可能であろうとも考えられる。

さらに，本稿では，欧米の論文のレビューから見えてきたことを，先行研究の知見等とから

めながら，上記に示した傾向の背景に展開している様々な可能性を指摘した。指摘した可能性が実際に展開しているかどうかについては，本稿の扱う範囲を超えるが，今後，これらの可能性が実際に展開しているかを実証的に検討することも意義があるだろう。

なお，本稿の知見の汎用性については留意が必要だろう。まず，本稿において論文の選択基準に恣意性が入る部分は限られていた。しかし，本稿は査読付き雑誌に限定したため，書籍や学位論文等は対象とならなかった。さらに，PsycINFO に登録されていない研究もある。これらの点以外にも，そもそも研究にまとめられている実践活動の方が少ないという状況も考慮すべきだろう。北米で行われた郵送調査において臨床家が研究に関する出版物を出している本数は平均1.2本（*SD*＝3.0）で最頻値が0（60%）であった（Morrow-Bradley & Elliott, 1986）。このことからも，複数の人種的背景を持つ人々を対象とした心理援助活動においても，実践活動の大半が研究として発表されていないと考えるのが妥当であろう。これらのことから，実際の実践活動は，本稿が示した傾向とは異なる可能性も否定できない。

本稿にはこのような限界があるものの，先述のように，これまで複数の人種的背景を持つ人々を対象した臨床的事例研究を比較し，そこから見える傾向を検討する作業はなされてこなかった。そのような状況において，本稿が示した点は，実践活動を行ううえでも，研究活動を行ううえでも，参照枠として一定の役割を果たすことが期待できる。今後は，本稿が提示した点をふまえながら，複数の人種的／民族的背景を持つ人々に対する心理援助活動を展開する一方で，方法論も洗練しながら，さらなる実践知を産出することが求められる。

引用文献

Addis, M. E., & Mahalik, J. R. (2003). Men, masculinity, and the contexts of help seeking. *American Psychologist*, *58*, 5-14.

American Psychological Association. (2015). *Demographics of the U.S. psychology workforce: Findings from the American Community Survey*. Washington, DC: Author.

American Psychological Association. (2017). Cultural Diversity & Ethnic Minority Psychology. Retrieved from http://www.apa.org/pubs/journals/cdp/ (September 10, 2017.)

Antony, M. M., & Rowa, K. (2008). *Social anxiety disorder*. Ashland, OH: Hogrefe & Huber Publishers.

Bonovitz, C. (2009). Mixed race and the negotiation of racialized selves: Developing the capacity for internal conflict. *Psychoanalytic Dialogues*, *19*, 426-441.

Caldwell, K. (1995). Decreasing sensitivity to stressors: The lilac episode. *Journal of Family Psychotherapy*, *6*, 79-81.

Charmaraman, L., Woo, M., Quach, A., & Erkut, S. (2014). How have researchers studied multiracial populations? A content and methodological review of 20 years of research. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, *20*, 336-352.

Dattilio, F. M., Edwards, D. J. A., & Fishman, D. B. (2010). Case studies within a mixed methods paradigm: Toward a resolution of the alienation between researcher and practitioner in psychotherapy research. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, *47*, 427-441.

Edwards, D. J. A., Dattilio, F. M., & Bromley, D. B. (2004). Developing evidence-based practice: The role of

case-based research. *Professional Psychology: Research and Practice*, *35*, 589-597.

Fishman, D. B. (2005). Editor's introduction to PCSP--From single case to database: A new method for enhancing psychotherapy practice. *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, *1*, 1-50.

Fishman, D. B. (2013). The pragmatic case study method for creating rigorous and systematic, practitioner-friendly research. *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, *9*, 403-425.

Fishman, D. B., Messer, S. B., Edwards, D. J. A., & Dattilio, F. M. (Eds.). (2017). *Case Studies Within Psychotherapy Trials: Integrating Qualitative and Quantitative Methods*. New York, NY: Oxford University Press.

Freeman, K. A. (2004). "Successful" treatment of persistent nocturnal enuresis in an adolescent with graduated night waking. *Clinical Case Studies*, *3*, 350-364.

藤岡 勲（2014a）．2つの民族的背景を持つ人々の両背景を統合したアイデンティティ　質的心理学研究，No.*13*，24-40.

藤岡 勲（2014b）．『心理臨床学研究』における民族的マイノリティを対象とした研究活動　心理臨床科学，*4*，13-23.

岩壁 茂（2013）．臨床心理学における研究の多様性と科学性――事例研究を超えて――　臨床心理学，*13*，313-318.

Iwakabe, S., & Gazzola, N. (2009). From single-case studies to practice-based knowledge: Aggregating and synthesizing case studies. *Psychotherapy Research*, *19*, 601-611.

Jones, N. A., & Bullock, J. (2012). The two or more races population: 2010. Retrieved from https://www.census.gov/prod/cen2010/briefs/c2010br-13.pdf (September 10, 2017.)

Kazdin, A. E. (2007). Mediators and mechanisms of change in psychotherapy research. *Annual Review of Clinical Psychology*, *3*, 1-27.

Lejuez, C. W., Hopko, D. R., & Hopko, S. D. (2002). *The brief behavioral activation treatment for depression (BATD): A comprehensive patient guide*. Boston: Pearson Custom.

Loveless, J. P., Whited, M. C., Rhodes, A. C., & Cellucci, T. (2016). The blending of evidenced-based protocols in the treatment of borderline personality disorder: A case study. *Clinical Case Studies*, *15*, 392-408.

Lyles, M. R., Yancey, A., Grace, C., & Carter, J. H. (1985). Racial identity and self-esteem: Problems peculiar to biracial children. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, *24*, 150-153.

McLeod, J. (2010). *Case study research in counselling and psychotherapy*. London: SAGE Publications.

Morrow-Bradley, C., & Elliott, R. (1986). Utilization of psychotherapy research by practicing psychotherapists. *American Psychologist*, *41*, 188-197.

野田 亜由美（2014）．研究法としての事例研究――系統的事例研究という視点から――　お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要，*16*，45-56.

岡村 兵衛（2016）．「ハーフ」をめぐる言説――研究者や支援者の著述を中心に――　川島 浩平・竹沢 泰子（編）　人種神話を解体する3――「血」の政治学を越えて――（pp.37-67）東京大学出版会.

Omi, M., & Winant, H. (2015). *Racial*

formation in the United States (3rd ed.). New York, NY: Routledge.

Puff, J., & Renk, K. (2015). Preschool PTSD Treatment (PPT) for a young child exposed to trauma in the Middle East. *Clinical Case Studies*, *14*, 388-404.

Ratigan, B. (1995). Inner world, outer world: Exploring the tension of race, sexual orientation and class and the internal world. *Psychodynamic Counselling*, *1*, 173-186.

SAGE Publishing. (n.d.). Clinical Case Studies. Retrieved from https://us.sagepub.com/en-us/nam/node/6720/download-pdf (September 10, 2017.)

Scheeringa, M. S., Amaya-Jackson, L., & Cohen, J. (2010). *Preschool PTSD treatment*. Unpublished manuscript. Department of Psychiatry and Neurology. Tulane University Health Sciences Center. New Orleans, LA.

Shih, M., & Sanchez, D. T. (2005). Perspectives and research on the positive and negative implications of having multiple racial identities. *Psychological Bulletin*, *131*, 569-591.

総務省統計局. (n.d.). 人口動態調査 Retrieved from https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020101.do?_toGL08020101_&tstatCode=000001028897&requestSender=dsearch (September 28, 2017.)

Staley, C. S., & Lawyer, S. R. (2010). Behavioral activation and CBT as an intervention for coexistent major depression and social phobia for a biracial client with diabetes. *Clinical Case Studies*, *9*, 63-73.

Sue, D. W., & Sue, D. (2016). *Counseling the culturally diverse: Theory and practice* (7th ed.). Hoboken, New Jersey: John Wiley & Sons.

Takeuchi, J. (2000). Treatment of a biracial child with schizophrenoform disorder: Cultural formulation. *Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology*, *6*, 93-101.

Tracy, S. J. (2010). Qualitative quality: Eight “big-tent” criteria for excellent qualitative research. *Qualitative Inquiry*, *16*, 837-851.

Tummala-Narra, P. (2007). Trauma and resilience: A case of individual psychotherapy in a multicultural context. *Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*, *14*, 205-225.

VandenBos, G. R. (Ed.). (2007). *APA dictionary of psychology*. Washington, DC: American Psychological Association.
（ファンデンボ，G. R. 繁桝 算男・四本裕子（監訳）(2013)．APA 心理学大辞典 培風館）

Walker, K., Burman, E., & Gowrisunkur, J. (2002). Counting black sheep: Contextualizing therapeutic relations. *Psychodynamic Practice*, *8*, 55-73.

Yin, R. K. (2018). *Case study research and applications: Design and methods* (6th ed.). Thousand Oaks, California: SAGE Publications.

付　記

本研究は科研費17K13951の助成を受けたものです。